

# Lの母音化 (l-vocalization) について

中道嘉彦

## 1. はじめに

英語音声学の授業でl(エル)の音を扱う際、まず有声歯茎側音 (voiced alveolar lateral) という名称を教え、発音の仕方を説明する。またlには「明るいl」と「暗いl」の2種類があり、両者は音色が異なり、その出現する場所も違うことを指摘する。さらには half などのように、綴りにlがあるのにlを発音しない単語があることに注目させる場合もある。

英語には綴りと発音に大きな乖離があり、発音しないlもその代表的な例である。綴りにlがあるのは、かつて発音されていたためであり、現在それが発音されないのは、発音の変化に綴りの改良が追いついていないからである。すなわち half は、かつては「ハルフ」のように発音されていたが、ある時点でlが発音されなくなり「ハーフ」となったが、綴りは相変わらず half のママだということである。「ハルフ」が「ハーフ」になったのは「lの母音化」と呼ばれる現象で説明できる。この現象は英語のみならず他のヨーロッパ系言語でも見られる、かなり普遍的な現象である。本稿では「lの母音化」によって説明できる綴り・発音の関係を、英語の他にロマンス諸語の例も視野に入れて考察したい。

## 2. 「lの母音化」とは

「lの母音化」とは、過去に発音されたはずのlが、ある条件のもとで母

音に変化することをいう。L という文字が表す音 /l/ は、有声歯茎側音 (voiced alveolar lateral) と定義される。声帯を振動させ、舌尖を上アゴの歯茎につけ、舌の両側または片側から呼気を口の外に放出して作る。この /l/ には 2 種類あることが知られている。1 つ目は「明るい l (clear l)」で、前舌母音、すなわち /i/ や /e/ に近い音色を持ち、語頭や、母音ないしは /j/ の前に現れる。舌尖は歯茎に接触し、前舌面 (front) が硬口蓋に向かって盛り上がって (下の Fig. 41<sup>1)</sup> を参照) いる。2 つ目は「暗い l (dark l)」と呼ばれ、後舌母音、すなわち /u/ や /o/ に似た響きを持ち、語尾や子音の前に現れる。舌尖が歯茎に接触するのは「明るい l」と同じだが、後舌面 (back) が軟口蓋の方に盛り上がって (下の Fig. 42<sup>1)</sup> を参照) いる点が違う。

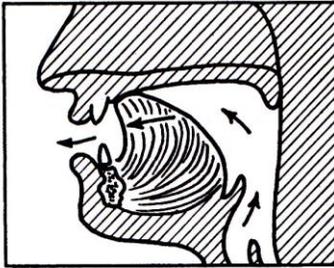


FIG. 41.—/l/; clear [l].

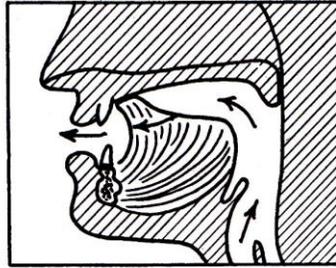


FIG. 42.—/l/; dark [ɫ].

「暗い l」の場合、舌尖は歯茎に触れているものの、「明るい l」に比べてその接触面は狭い。さらに後舌面が軟口蓋の方に盛り上がると、舌全体が後ろ・上の方に引っ張られ、かろうじて接していた舌尖が歯茎から離れる場合がある。そうになると、もう側音とはいえ、後舌母音のような音色になる。これが「l の母音化」である。これは我々の耳には「ウ」や「オ」に聞こえる。

母音化された l は身の回りでもいくつも発見できる。以前のカタカナ表記なら wonderful は「ワンダフル」、unbelievable は「アンビリーバブル」、people 「ピープル」だった。しかし、最近では、「ワンダフォー」、「アンビリーバボー」、「ピーボー」という表記も見かける。これはまさに母音化された l の原語発音を意識して表したものであろう。またビートルズの“Help!”では「へ

オブ」のように叫んでいるように聞こえるし、サッカー選手 Cristiano Ronaldo は「クリスティアーノ・ロナウド」と記されている。

この「I の母音化」は過去に英語や周辺の言語でも起きたし、現在でも少しぞんざいな発音では起きうる。まずロマンス諸語における「I の母音化」から見て行こう。

### 3. ロマンス諸語における「I の母音化」

ロマンス諸語とは古典ラテン語から転訛した俗ラテン語をもとに、それから発展した諸言語のことである。イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語、フランス語などがその具体例である。

#### 3.1 ラテン語とロマンス諸語の比較

以下に al を綴りに含むラテン語の単語を最初に置き、ロマンス諸語の代表例としてイタリア語、スペイン語、フランス語の単語を並べた。ラテン語の al の l は子音の前に来るので「暗い l」である。イタリア語とスペイン語では l がほとんど保存されているのに対し、フランス語では u に変わっている。言い換えるとフランス語では「暗い l」が母音化し、その結果 u と綴られているのである。このことからフランス語では「I の母音化」が起きやすいと言えよう。

<L>	<It>	<Sp>	<F>
alba 「白い(女性形)」	alba	alba	aube
alter 「他の」	altro	otro	autre
balsamum 「バルサム」	balsamo	balsamo	baume
calidus 「暑[熱]い」	caldo	caldo 「煮汁」	chaud
falsus 「偽りの」	falso	falso	faux
palma 「シュロ、掌」	palma	palma	paume
psalmus 「詩篇」	salmo	salmo	psaume
salmōnem 「サケ」	salmone	salmón	saumon
salsa 「塩漬けの(女性形)」	salsa	salsa	sauc*

Lの母音化 (l-vocalization) について (中道嘉彦)

(farta) salsīcia 「塩の(腸詰め)」	salsiccia	salchicha	saucisse*
salvāre 「救済する」	salvare	salvar	sauver**

\*英語の *sauce* や *sausage* はフランス語の *sauce* や *saucisse* から来ている。ラテン語まで遡ると、「塩」の意味が入っていることがわかる。

\*\*英語の *salvage* と *save* はラテン語の *salvāre* を共通の語源として持つ二重語 (doublet) である。salvāre の l を残したのが *salvage*、*salvation* である。フランス語での母音化の過程を経て英語に借入されたのが *save* である。

次に *el* を含むラテン語と、そこから発達したイタリア語、スペイン語、フランス語を並べた。Al の場合と同様、ここでもフランス語だけに「l の母音化」が起きている。

<L>	<It>	<Sp>	<F>
bellus 「美しい」	bello	bello	beau*
castellum 「城、砦」	castello	castillo	château

\*英語の *beautiful* はフランス語の *beau* を借入し、それにフランス語系接尾辞 *-ty* をつけて名詞 *beauty* を作り、さらに英語系の接尾辞 *-ful* を付加したものである。シェイクスピアの『ヴェニスの商人』に架空の地名 *Belmont* が出てくるが、これに「l の母音化」が加わると、フランスのごく普通の人名・地名 *Beaumont* との関係が見えて来る。

以下はラテン語の綴りに *ul* を含む語である。イタリア語では l を引き継いでいるが、スペイン語とフランス語では l が母音化したため、l は綴りに現れない。

<L>	<It>	<Sp>	<F>
multus 「多くの」	molto	mucho/muy <sup>2)</sup>	muche

### 3.2 前置詞と冠詞の縮約

英語の前置詞 *to* や *of* に相当するイタリア語、スペイン語、フランス語の前置詞と男性単数の定冠詞が結びついて1語になると語形が変化し、縮約形を作る。3言語とも同じ構造をとるが、以下のようにフランス語だけ発音の変化が著しい。

<It>	a + il → al	di + il → del
<Sp>	a + el → al	de + el → del
<F>	à + le → au	de + le → du

フランス語で *le* が *u* になっているように見えるのは男性単数の定冠詞 *le* が母音化しているからである。つまり「暗い l」が後舌母音の音色を持っているため、*u* と表記されているのである。

## 4. 英語における「lの母音化」

### 4.1 綴りには残るも発音からは消えた l を含む英語

以下に「lの母音化」が起きたと考えられる英単語を古英語 (OE)、中英語 (ME)、近代英語 (ModE) の順に並べた。Lは現在に至るまで保存されているが、近代英語初頭に発音から消えたようだ<sup>3)</sup>。

<OE>	<ME>	<ModE>
ælmesse 「施し」	almes(se)	alms
---	baume <sup>4)</sup> 「香油」	balm
ċealf <sup>5)</sup> 「子牛」	calf	calf, cauf
ċealc 「白亜」	chalk	chalk
folc 「人々」	folk	folk
healf 「半分」	half	half, hauf
palm(a) 「シュロ、掌」	palm/paume	palm

psalm 「聖歌」	psalm	psalm
cwealm 「心の咎め」	qualm	qualm
talian <sup>6)</sup> 「勘定する」	talken	talk 「話す」
wealcan 「転がる」	walken	walk 「歩く」
geoloca <sup>7)</sup> 「卵黄」	yolk (e)	yolk/ye (o) lke

#### 4.2 / tʃ / の前後での「lの母音化」

/tʃ/の前後でlが母音化した例を古英語、中英語、近代英語の順に並べた。

<OE>	<ME>	<ModE>
ǣl̥c 「それぞれの」	ech	each
hwil̥c 「どの」	which	which
mi̥c̥el 「多くの、大きい」	mu̥che (l)	much
swil̥c 「そのような」	swich	such
wen̥c̥el 「子供」	wen̥che (l)	wench

古英語においては、上記の語はいずれも l を発音していたが、中英語になって l が発音されなくなった、すなわち母音化したと思われる。綴りからも l が消えた。時期は 11 世紀、後期古英語の時期である<sup>8)</sup>。いずれも /tʃ/ の前後で起きており、母音化した l はいずれも「暗い l」である。

each、which、such に対応する語をドイツ語とオランダ語 (いずれもゲルマン語派に属する) から拾って、下に載せた<sup>9)</sup>。

<E>	<G>	<Du>
each < OE ǣl̥c	jeglich	elk
which < OE hwil̥c	welch	welk
such < OE swil̥c	solch	zulk

古英語と同様、綴りに l が含まれている。英語では古英語にあった l が母音に変化して現在の発音と綴りになっているが、ドイツ語とオランダ語にお

いては I の母音化が起きず、古い語形が残っていると思われる。同じゲルマン系の言語でも英語は「I の母音化」が起きているのに対し、ドイツ語とオランダ語では起きていないのは興味深い。

### 4.3 機能語での母音化

<OE>	<ME>	<ModE>
eal (l) swā	alse	as
sc (e) olde <sup>10)</sup>	shulde/shude	should
wolde	wulde/wude	would

機能語に含まれていた「暗い I」の母音化は 15 世紀から始まった<sup>11)</sup>。should と would の I は、それぞれの原形 (shall と will) に I があるので、語源的に必要な I である。ちなみに could (OE cūþe > ME coude > ModE could) の I は should、would からの類推で綴りに入ったもので、語源的には不必要である。助動詞という同じカテゴリーに属するので多数派の形に合わせた結果である。

## 5. おわりに

「L の母音化」という現象がわかると、今まで無関係だと思われていた 2 つの単語が結びつくことがある。2、3 例を挙げてみたい。まずは人名から。ラッセル (Russell) の語源を調べると古フランス語 rous 「赤」に指小辞の-el が付加されてできた固有名詞である (寺澤, p. 1203 参照)。「赤」が人名に使われる場合、その人の身体特徴を表していることが多い。すなわち、この人名には「赤ら顔の」、あるいは「赤毛の」という意味が入っていると思われる。したがって Russell は「赤い顔[髪]の小柄な人」という意味になるうか。この指小辞語尾-el に含まれる I は「暗い I」なので母音化し、フランス語なら eau と綴られる可能性がある。それがフランスの哲学者ルソー (Rousseau) の綴りに繋がる。ラッセルとルソーはカタカナで書いても、あるいはアルファベットで綴っても全く別物に見えるが、実は意味も構造も同じ語なのである。Russell の語尾の /l/ を「オ」に近い「暗い I」で発音すると、随分ルソーに近い発音になることを実感できる。

次は地名の例である。旧ユーゴスラビア、現在のセルビア・モンテネグロの首都、ベオグラードは英語では **Belgrade**、セルビア語では **Beograd** と表記する。日本語の発音はセルビア語に由来しているようである。セルビア語の **Beograd** では元々あったはずの l が母音化し、それを o で表記するが、英語の **Belgrade** は元々あった l を残した綴りのようである。この地名は 2 つの要素からなっており、最初の **Beo-**、ないし **Bel-** はスラブ系の「白い」を意味する **belo** から来ている。ベラルーシ (**Belarus**=白ロシア) にも入っている。グラードは「街、都市の」を表すスラブ系の語である。したがって、ベオグラードは「白い街」の意味になる。同じ語源を持つベルゴロド (**Belgorod**) という都市がロシアにあり、その由来は石灰岩の産地だからだそうだ。

古フランス語の方言は、ロワール川 (**Loire**) 以北のオイル語 (**langue d'oïl**) と以南のオック語 (**langue d'oc**) の 2 つに大別される。北部では「はい (**yes**)」をオイル (**oil**) と言い、南部ではオック (**oc**) と言った。パリを含む北部のオイル (**oil**) が標準的な肯定の返事、すなわち「ウィ (**oui / wi /**)」になったそうだ<sup>12)</sup>。Oil から oui に至る過程で l の母音化が起きたに違いない。Oil の -l は語尾に来るので「暗い l」であり、おそらくは「オイオ」のような発音だったはずだ。

このように、一言で l (エル) といってもなかなか奥が深い。本稿で取り上げた例は、ごくわずかだが、ロマンス諸語の中ではフランス語が、ゲルマン諸語では英語が「l の母音化」を起こしやすかった、と言えるのではないだろうか。綴りに l があるのに発音されないのは何故か、という英語を勉強し始めた頃に抱いた素朴な疑問は、音声学の知識を用いて英語を含むヨーロッパ系の言語を歴史的に見ていくことによって、ある程度解明されると思われる。他の例を 1、2 挙げると、**sauté** 「ソテーにする」や **savage** 「野蛮人」にも「暗い l」が母音化した痕跡を認めることができる。そのつもりで探してみると、まだまだありそうである。

## 註

- 1) FIG. 41 と FIG. 42 は Gimson, p. 201 を参照。
- 2) スペイン語の **mucho** は **multus** の l が母音化し、さらに t が口蓋化して **mucho** となったものである。一連の変化は **multus > muito > mucho** となる。mucho

の異形 *muy* については *multo* > *muit* > *muy* のように語尾音消失の結果である。寺崎、p. 115 を参照。

- 3) *l* が発音から消失するのは15世紀から16世紀前半にかけての変化である。  
*al* を *au* で綴ることもあった。中尾、pp. 420-421 を参照。 *caif* や *half* もそれぞれ *cauf*、*hauf* と綴られたことがシェイクスピアの『恋の骨折り損』の5幕1場、*Holofernes* のセリフからも伺うことができる。 *cauf*、*hauf* は *l* の母音化を反映した綴りと考えられる。
- 4) ラテン語 *balsamum* から古フランス語を経て中英語に借入された。
- 5) 古英語の *ċ* は /tʃ/。
- 6) *tell* や *tale* と関連のある語。中英語で *k* が現れるのはフリジア語の *talken* の影響から。 *-k* は反復を表す接尾辞で *walk* にも現れる。寺澤、p. 1401 を参照。
- 7) 古英語の *ġ* は /j/。
- 8) *Upward and Davidson*, p. 49、および中尾、p. 420 を参照。
- 9) 残念ながら英語の *much*、*wench* に相当し、なおかつ *l* を含んだドイツ語、オランダ語の単語は見つからなかった。
- 10) 古英語で *sc* は /ʃ/。
- 11) 中尾、p. 420 を参照。
- 12) 田桐、p. 181 を参照。

### 言語名の略形

Du	Dutch	E	English
F	French	G	German
It	Italian	L	Latin
ME	Middle English	ModE	Modern English
OE	Old English	OF	Old French
Sp	Spanish		

### 参考文献

- 大名力『英語の文字・綴り・発音のしくみ』研究社 2014  
島岡茂『ロマンス語の話』大学書林 1970

- 島岡茂『ロマンス語比較文法』大学書林 1986
- 田桐正彦『フランス語 語源こぼれ話』白水社 1998
- 竹林滋『英語音声学』研究社 1996
- 寺崎英樹『スペイン語史』大学書林 2011
- 寺澤芳雄 (編)『英語語源辞典』研究社 1997
- 中尾俊夫『音韻史』(英語学大系第 11 卷) 大修館書店 1985
- 松坂ヒロシ『英語音声学入門』研究社 1986
- 山田秀男『フランス語史』駿河台出版社 1981
- Clark Hall, J. R. and Meritt, H. D., *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*, 4<sup>th</sup> ed., CUP, 1960.
- Davis, N. et al., *A Chaucer Glossary*, OUP, 1979.
- Gimson, A. C., *An Introduction to the Pronunciation of English*, 3<sup>rd</sup> ed., Arnold, 1980.
- Kurath, H., (ed.), *Middle English Dictionary*, University of Michigan Press, 1954-2001.
- Onions, C. T., *A Shakespeare Glossary*, OUP, 1911.
- Sweet, H., *The Student's Dictionary of Anglo-Saxon*, OUP, 1896.
- Upward, C. and Davidson, G., *The History of English Spelling*, Wiley-Blackwell, 2011.